

イベント

「石福昭先生お別れの会」 執り行われる



▲参加者に礼を述べる石福みえ子夫人

(株)日建設計、宇都宮大学、早稲田大学において長年にわたり建築物理学および建築設備学の分野を牽引した石福昭博士の「お別れの会」が、2025年6月28日、東京・港区の建築会館ホールにて開催された。

この会は、従来の形式にとらわれず、「故人の業績と人柄を語り合う、和やかで前向きな集い」として企画され、司会は早稲田大学時代の教え子である成田まゆみ氏が務めた。開会にあたり、日建設計時代の同僚であり、会の実行委員長を務めた牧村功氏から、「献花を行わず、先生の足跡と思い出を分かち合う時間としたい」と趣旨説明があった。

石福氏が長年、キリスト教会に通っておられたことにちなみ、讃美歌21の第370番「主よ、みもとに近づかん」が静かに流れる中、出席者全員で黙祷を捧げた。続いて、日建設計時代の同僚である小倉善明氏、宇都宮大学時代の

教え子で、現在は日建設計に勤務する小池康之氏が弔辞を述べ、故人との出会いや学びを振り返った。

献杯の発声は、田辺新一・元日本建築学会会長(早稲田大学教授)が務め、その後、多くの関係者が思い出を語った。

古谷誠章・早稲田大学名誉教授は、「石福先生は、建築設備を単なる機能ではなく、美の要素として設計されていた稀有な存在だった」と語った。また、宇都宮大学での教え子であり、現在(株)ナカノフドー建設社長を務める石塚隆氏は、「先生の描かれた絵を社長室に飾り、日々そのまなざしに見守られながら仕事に臨んでいる」と述べ、感謝の意を表した。三井所清典・芝浦工業大学名誉教授は、明治神宮神楽殿の共同設計を振り返り、「設備においても

建築の美を損なわぬよう細心の注意を払う、その姿勢に学ぶことが多かった」と語った。

田中辰明・お茶の水女子大学名誉教授は、故人との長年の交流を紹介した。1970年の建築基準法改正による高さ制限の撤廃を契機とした建築構造の変化に触れ、当時、自身が大林組技術研究所に勤務していた時に開発に関わっていた「回転式空調実験室」に石福氏が注目し、南面に大開口を持つパレスサイドビルの設備設計に先立って訪問したエピソードを紹介。冬季でも冷房負荷が生じるという課題に対し、科学的検証を重視された石福氏の姿勢に、両者の専門的協働が始まったと語った。

その後、長谷見雄二早稲田大学名誉教授の閉会の辞により散会した。

当日は、尾島俊雄・早稲田大学名誉教授をはじめ、建築界の内外から約130名が出席。故人の温かな人柄と、設備設計に美と倫理を追求したその精神を改めて胸に刻む機会となった。「お別れの会」は会費制で行われ、余剰金は故人が勤務した早稲田大学と宇都宮大学の建築学科に、それぞれ18万5千円が寄贈された。

